

# 現場に高校再編を聞く

トップ・ダウンで大学進学シフトに特化

高校教員へのアンケートを読む

大滝 浩道

はじめに

2002年（平成十四）に新潟県教育委員会が「中期高校再編整備計画」発表して以来、公立高校は大きく変わりつつあります。長い間親しまれた地域の高校が統廃合で廃校になったり、校名が変わったりしています。そればかりか多様な学科やコースが設置されています。また中等教育学校（中高一貫教育校）も各地に設置されています。

急激にすすむ高校再編のなかで、現場はどうなっているのか、また再編にどう対応しているのか、現場の先生方にアンケート調査を実施しました。

アンケート調査は再編がすすんでいると思われる学

校を特定して、調査用紙を送付して実施しました。アンケートを送付した学校数は三〇校、三〇人。調査の範囲や人数が少ないために、現場の声を十分に聞き取ることが出来ませんでした。

① あなたの学校では高校再編が行われましたか。  
その場合に問題点は何ですか。

県教委のすすめる再編計画は2003年から一〇年計画で実施されているために、アンケートに回答した学校の三分の一程度の学校ではすでに終わっていて、残る三分の二で再編がすすんでいるか、再編が今のところはないという状況でした。再編がないと答えた学

校では普通科の進学校が多いようでした。

総合高校に改組した学校では、施設設備の整備が追いつかない状況がみられました。工業系のコースで旋盤やフライス盤がない等の声が寄せられています。総合高校の設置は今回の再編の特徴の一つですが、総合高校のうたい文句である生徒の多様なニーズに応えるには、施設設備の整備が欠かせません。

またある普通高校ではそれまでの「一学級増」を、元に戻して一学級減にするという連絡で、一学級減の授業展開を計画していたが、結局、一学級増のまま現場が混乱したという声も聞かれました。県教委の方針が揺れ動いているように見えます。

また商業高校に進学対策なのか多様な学科が設置された結果、学校が商業高校なのに商業の科目をほとんど履修しないで卒業する生徒が出る可能性もあり、現場で戸惑っている様子も見られました。

また中高一貫教育校に衣替える学校からは、これまで一定の志願者数を維持して来たのに、なぜ募集停止して中等一貫教育校なのか、生徒や保護者に説明が出来ない等の戸惑いも聞かれました。

これらの現場の戸惑いや困惑は、トップ・ダウン方

式で県教委からの再編によってもたらされていると言えそうです。

② あなたの学校の大学進学率向上の取り組みをお教えてください。問題はどんなことでしょうか。

普通高校、総合高校、専門高校ともに大学進学について「保護者への説明会や面接によるアドバイスを一年生のうちから行っている」（上越地区の総合高校）ようです。低学年のうちからの進学シフトが常態化しているようです。

普通高校では再編はほとんどないものの、「カリキュラムの検討、学年ごとの進学補修、学習合宿など数多くの進学のための取り組みがなされて」います。そのために「多くの問題を抱えた生徒と、担当が面談する時間が不足している」「小テストなどが多く、生徒の負担はかなりのものになっている」（上越地区の普通高校）。また「七限授業、土曜補修」（下越地区の普通高校）などがどこの高校でも実施しているようです。

しかし校長等から見ればまだ不十分なのか「新校長が赴任早々、学校の実情も意見も聞かず、カリキュラムの改訂や授業内容への介入」（上越地区の普通高校）

をしている学校がいくつかみられました。

それは「基礎学力も備わっていない」「受験校」の様相であったり、「生徒にほとんど適しないことを無理にやっている」（同前）と現場には映っているようです。新校長の意見は県教委の意見でもあるのでしよう。

一方、総合高校でも「進学コースの名前を使い始め、中学校での説明会に宣伝文句として利用」している。

そのために「クラス編成が成績によって偏りが出るなどの問題点も指摘されています。

大学進学の際の合いは専門学校でも同様ですが、「専門科目の推薦枠の利用」や「指定校枠の獲得をめざして指導しているのが現実のようです。

高校再編がすすむなかで「学校がどんどん民主的運営からかけ離れ、進学率向上だけが一人歩きしている」（下越地区の普通高校）のが高校現場の実態のように見えます。

### ③ 中高一貫教育校の影響がありますか。

県内では中高一貫教育校がたくさん出来ていますが、村上をのぞいてまた卒業生を出していないためか、ほ

とんどの地域で「特に変化はない」（新潟市内、佐渡地区）が、「今、影響があるとすれば小規模中学校がさらに生徒数が減少する」（佐渡地区）ことを心配する意見も出されました。

しかしすでに中高一貫教育校が出来た地域では、少なからず影響が出てきているようです。上越や下越地区の進学校といわれる高校では「学力でいうと上のレベルがほとんど入っていない。模試の全国偏差値で45〜50ぐらい」「相対的に学力が下がってきている感がある」とみえています。

中高一貫教育校はいまのところ都市部でなく、都市周辺部で設置されていますが、新潟市内で市立高志高校に公立としては初の中高一貫校ができようとしています。周辺の学校ではその影響が読み取れないようなアンケートの回答でも「高志高の動向がどのような影響として出てきますか？」という逆質問もありました。

また中高一貫校に切り替わった学校では、在校生と中等の生徒との部活の施設、設備の確保に頭を悩ましているようです。特に部活の活発な学校ほど深刻だと思われる。

④ そのほか高校再編で感じていることがありますか。

現在の高校再編が県教委のいうように「時代や生徒保護者のニーズ」であつたとしても、大学進学率向上の施策が軸になつてゐることは疑問の余地がありません。「歩いて通学できる高校が直江津地区に一校もなくなつてしまつた。地域格差の拡大が広がるばかり」（上越地区の総合高校）「大学に進学させても四年後の受け入れ先がないことを心苦しく思うことがあります。地域が崩壊してしまうのではないかと思うことがあります」（上越地区の普通高校）。

この文章を読んで私はこの春、津南町の小中学校の統廃合の調査でお会いしたあるお母さんが、地元で中高一貫教育校ができたことにかかつて「学力が向上して上級学校に進学すれば、この土地に残らないのではないのでしょうか。誰が年寄りの面倒をみるのでしょうか」といった言葉を思い出しました。

最後にこの高校再編のあり方を批判する、いくつかの現場の声を紹介します。

「中学生とその父母に、普通科指向が強いというこ

とで職業高校が統廃合されてきたが、本当にそれでいいのか。それでいて、新たな特色を出せ、進学を目指せとして、わけの分からないような学科、コースがつけられてゐるような気がする」（新潟市内の専門高校）  
「県でこうしたことを計画している人たちは、現場でどれほど無理を強いているか、おそらく分かつていない」（上越地区の普通高校）

「トップ・ダウン的決断で、教員の声（中学、高校とも）がほとんど反映されていなかった」（新潟市内の総合高校）

「生徒一人ひとりを大切にしている教育を、戦後日本は曲がりなりにも実施してきたが、現在、民主的、自主的な教育のあり方からどんどん離れている」（下越地区の普通高校）

むろん高校のあり方も時代の流れのなかで、改革を必要とすることは言うまでもないことです。今のままでいいとは思えないが、現場の声を聞かない、あるいは現場の教職員が納得しない再編では成功は覚束ないように思われます。生き生きとした教育とは程遠いものになりはしないかと不安になりました。

（おおたき こうどう 所員）